

# タスク活動を取り入れた英単語学習と実践

松家鮎美, 山中マーガレット

岐阜女子大学 文化創造学部

(2015年12月20日受理)

## Task-Based Learning and English Vocabulary

Department of Cultural Development

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

Ayumi Matsuka, Margaret Yamanaka

(Received December 20, 2015)

### 要 旨

In this paper, the authors look at the importance of Task-Based Learning and its connection with the study of English in Japan. Swain's "Three functions of Output" is looked into, and tested as part of the Task-Based Learning (TBL) system. In particular, Matsuka uses a vocabulary exercise in a Communication class to illustrate how Task-Based Learning can promote retention of words and their meanings, as shown by the high marks students gained for vocabulary studied through the TBL system.

Keywords: Task-Based Learning, TBL, vocabulary, EFL

### 1. グローバル社会と英語に対する苦手意識

グローバル社会が声高に叫ばれる現在, 国境を超えたコミュニケーション能力を求められる機会が増加している。日本貿易振興機構(2015)によると, 2014年に日本企業9,183社を対象にしたアンケートによれば, 今後海外に向けた輸出拡大を志向すると回答した大企業は, 全体の75.3%であった。また, この水準は大企業だけに留まらず中小企業にも波及しており, 回答をした中小企業の内78.5%が, 輸出を拡大する若しくは今後新たに取

り組みたいと回答している。この数値は2011年度に中小企業を対象に行ったアンケート(65%)と比べると, 12%の増加であった。また, 現在日本人が外国語によるコミュニケーションに触れる機会は, 海外へ行った時だけに留まらない。2015年11月末現在, 海外から日本を訪れた観光客は前年度と比べて47.5%増加しており(観光庁, 2015), 今後は, 日本国内にいながらも, 海外の人々に関わる機会が増えると想定される。それに伴い, 英語を始めとする外国語による意思疎通が求められる機会も増加すると推測できる。現に2009年に出された学習指導要綱にも外国語

によるコミュニケーション能力を養う必要性について明記されている。また、昨今の英会話塾の活況振りや TOEIC など英語関連の資格試験が多く活用されていることから、実践的な英会話能力の獲得の必要性が求められていることが分かる。

しかしその一方では、英語と聞くだけで苦手意識を持つ学習者は未だに多い。2002年に山口が佐賀県のある高校生を対象に調査を行ったところ「英語が不得意になった理由」の第2に挙げられたものが「単語や文を覚えられない」であった。また、ベネッセが2009年に全国の公立中学校の英語教員を対象に行った調査によれば、3,643人中約7割が英語のつまずきの原因を単語であると答えた。そこで、生徒の英語学習能力を高めるため、村上ら(2010)は比較的英語の得意な生徒と苦手な生徒について単語の覚え方を調べた。そこで、英語テストで得点の低い生徒達に「単語は普段どうやって覚えているのか」という質問を聞いたところ、「何度も紙に書くが、覚えられない」という答えが返って来た。

しかし、英語への苦手意識がありながらも、学習者は語彙力の必要性を認めているようである。ベネッセ教育研究所が2014年に中高生を対象に行った調査によると「話すためにはまず文法や単語が大切だと強く思っている」という意見が出され、生徒が単語を覚えられるか否かに関わらず、単語学習を行っている姿が伺える。しかし、英語の苦手な生徒の学力を補充する際、学校はドリルを持たせ、指導せずに数ページごとの単語を暗記させ、それを暗記テストで確認し、合格点を出すまで生徒を追い立て指導をするという問題的教育法が未だに残っていると三浦(2013)は言う。

玉木(2011)は、本来我々が言語を使用するのは、必要なことを伝達したり何かについ

て見解を持ったりするためだと述べている。言語は覚えることそのものが目的ではなく、それを使用しながら行動することで、社会を構成する一部となっていく。もしそのことが忘れられてしまえば、学習者自身は何のために言語を学ぶかが分からなくなり、学習に対するモチベーションも下がってしまうと指摘する。英語の場合も、本来は言葉を学んだ上でコミュニケーションをすることが目的であるにも関わらず、その学習過程の段階でモチベーションが低下するならばその方法は変えなければならない。そこで、本研究ではインプット説・アウトプット説、及びタスク活動による学習である TBL (Task Based Learning) を単語学習に導入できるかを試みた。

## 2. インプットとアウトプットの重要性

Krashen (1988) は学習者に理解可能な「インプット」(input) を与えれば、外国語が習得できると説く。つまり、赤ん坊が周りの会話を聞き、段階的に母国語を取得するのと同様のことが、第二言語習得にも言える。Krashen は仮説の中で、自分からは言葉を発せず、積極的に英語を聞くことが正確に言葉を掴む上で重要だと説いている。また、文法と語彙の重要性を認めながらも、語彙の取得に重きを置いている。特に成人学習者にとっては、単語さえ分かれば、会話の内容を推測できるという利点があると言う。Krashen は他にも第二言語取得に関するモチベーションの重要性も指摘しているが、本論では扱わない。

インプット仮説に対しては批判もある。言語を習得するためには、単にインプットを理解しているだけでは不十分だと指摘するのがアウトプット仮説である。Swain はアウトプットが単なる練習ではないと言いながら、

“Practice makes Perfect”ということわざを学生に推奨している。Swain (1995) は「アウトプット」(output) には三つの機能があるという。一つ目は、アウトプットによって学習者が自らの英語能力・語彙力に気づくことである。また、それが起こす連鎖によって、学習者がさらなる単語や表現を学ぶきっかけにもなる。二つ目として、「確かめの仮説」である。すなわち、学習者が知っていると思う表現を発言したり、それについてフィードバックを得ることにより、学習者が自分の力を試すことができる。そして Swain の言うアウトプット機能の三つ目は、メタ言語的なレベルのもので、学んだもの・確かめた表現を内在化することである。

三浦 (2013) の説明によると、アウトプットとは、他者に対して音声または文字で言葉を発信することを意味する。三浦は英語の不得意な生徒にアウトプットをさせることは容易ではないと指摘し、その理由として生徒は自分に自信がなく、間違えて級友に笑われてしまうことに恐怖を感じているからだを説明する。このことは Cheng and Dörnyei (2007) の台湾での調査でも見られる。即ち、グループ意識やグループの決断力及びグループに対する恐れが台湾や日本では学習者のモチベーションを左右するため、教育者もグループのノルマを設定することがあるが、ヨーロッパでは、教育現場での集団的行動をあまり重視しない。

ただ、学習者の恐怖心の根底には、本当は自分の英語力を高めたいと考える気持ちが存在する。著者が2015年に岐阜女子大学の観光英語の授業で行ったアンケート結果で報告したようにどの学生も「英語くらい話せるようになりたい」と思っている。ベネッセが示したアンケート結果では「話すためにはまず文法や単語が大切だと強く思っている」生徒

が多くおり、前述の通り Krashen, Swain, 三浦など国内外の言語学者も、コミュニケーションを取るには単語が不可欠であることを指摘している。

新出語彙については学習者の視点から考えると、授業で何度も触れられ学ばれるが、定期試験で出題された後、学習の焦点は次の課に移り、同じ所が再び学ばれることはないのが現状である。川 (2013) は Schmitt を引用し、「多くの教師の過ちは新出語に一度しか焦点を当てないことだ」と指摘した。そのため、本研究では「英語コミュニケーション」の授業において、授業で一度扱った単語についてペアワークを行い複数回触れることによる新出語彙の定着を試みた。これはアウトプットを繰り返すことによる試みであるが、三浦 (2013) の指摘に基づき、学習中の生徒が間違ったことを発するのを怖がらないようクラス全体での活動でなく、少人数での活動とした。クラス内でペアを作り、片方の生徒がランダムに英単語を選び口頭でクイズを出し合った。ここでは学んだ単語を各々で暗記しようとするのではなく、自分の判断で単語を選び、パートナーに対して口頭で質問を投げ掛け、相手の語彙力の定着を確認する作業を行った。クイズを出される側の生徒は、学んだ新出単語のうちアトランダムに英語若しくは日本語でクイズを出されるため、どちらが出てきても答えることを求められた。

### 3. 単語学習によるタスクの実践

タスク活動はインドの N. Prabhu から注目され、それまでの PPP (present-practice-produce) の教育法より自然な形の学習法であると多くの教育者に使用されるようになってきた (Ameri, 2010)。もちろん、日本のような授業外で英語を使用する機会の少ない EFL

(English as a Foreign Language) の環境においては、PPP の流れに沿った授業を評価する声もある (川本, 佐藤, 2011)。PPP については様々な定義が存在する中、藤井 (2005) によるとタスクは、一般的にコミュニケーション志向型の英語授業において使用される教室活動であり、習慣形成を目的としたエクササイズと対極をなすものと考えられて来た。

本稿で紹介する「英語コミュニケーション」の授業では、20個の新出単語でタスク活動の効果を調べることにした。これらの単語は教科書に出ているもので、日常会話の中で、使用頻度が高いと判断したものの中からアトラダムに選び、それらを学習者に与えることにした。受講者に意味などの確認をさせた後、全体の10個 (半分に相当するもの) を使い、タスクを取り入れ、残りを据え置きにし、学習者のレベルやタスク学習の効果を検証した。タスクを取り入れた単語をグループ A とし、取り入れなかった方をグループ B とした。(資料1参照)

Weskamp (2004) は、タスク活動を行う際は、学習者にとって適切な (難易度の) 活動を与えることを重視しており、著者は、学習者が普段の授業で使用しているテキストの中から単語を20語選んだ。それぞれ学習者が一度は耳にしたことのある単語が入っているが、綴りまでを正しく答えられるかという疑問府のつくものが多かった。特に和製英語に関してはそれらを英単語だと認識していた学習者が多く、誤って覚えている単語について正しい表記を学び直す意味において選択した。ただ全ての単語に関しては、授業内のテキスト学習で出てきたものを使用している。また確認テストを行う際は、授業中学習者が覚えるのに時間を要した語を中心に選択した。

### 3.1 授業プラン

第1回目の授業ではテキスト学習を通してグループ A の単語を10語学んだ。授業内で意味を確認した後にペアでクイズを出し合った。生徒 A のみテキストを開き、書いてある英単語を見て日本語の意味をパートナーである生徒 B に伝える。一方の生徒 B は、テキストを閉じたまま、生徒 A の単語クイズに英語で答える。最初にそれぞれのペアで3分間の練習を行った後、役割を交代した上でさらに練習を行う。合計6分間の練習をした後に本番と称しタスクを行う。その際は時間を計り、3分で幾つの単語クイズを出し答えられるかを、時間の制約を受けながら他のペアと競い合った。

一方単語グループ B に関しては、授業中にテキスト学習を通し意味の確認はするものの特にタスク活動や復習は行わなかった。グループ A 同様、翌週の授業ではどの位の単語を記憶しているかを簡単なテストで確かめた。(資料2参照)

坂田, 福田(2014)の行った調査によれば、80%の学習者は英語の自主学習を何もしていないと言う。教師側が宿題や課題を出し義務的に学習を行わせることが学習者の英語学習を促している指摘している。本研究に関しても、単語グループ A, B について課題として出すことは特にせず、また翌週の確認テストの実施についても言及しなかった。そのため、後日授業で確認を行ったところ、単語を自宅でも学習した生徒は見受けられなかった。坂田 (2014) らは、日本人が実用的な英語力を身につけるためには長期間にわたる学習が必要であり、そのためには学習者自身が目標を設定し、計画を立て、それに沿って学習を展開することの必要性について指摘しており、それはもっともである。しかし、本研究に関しては純粹に前回学んだ単語が自宅で

の復習を行うことなく、学習者の中に定着されているかどうかを問うたものである。

### 3. 2語彙力の定着

ペアでのクイズを経て覚えた単語グループ A に関しては、平均点は86点であった。全問正解者は12名(受講者の63%)おり単語の定着が認められた。一方タスク活動を行わなかった単語グループ B の場合、全問正解者は1人もいなかった。また全体の平均点は26点であった。

江利川・亘理(2013)が行った調査によると共同的な活動を行った授業での評価は「グループでの授業は楽しかった」とする回答が全体の96%、また「グループでの授業は効果的だ」という評価が98%と高く、「一人で勉強したほうがためになると思う(24%)」を圧倒的に上回っていた。江利川は、大学の授業で必要なことは講義形式の一方的な知識伝達ではなく、グループでの活動を取り入れながらコミュニケーション能力を高めて行くことが重要であることを指摘している。

### 4. 終わりに

単語学習が英語力の習得において基礎であることは明らかであるが、学習の仕方によっては単語学習をきっかけに英語自体を諦めてしまう生徒は少なくない。また努力して覚えた単語や文法ルールが生徒の中に定着しないことはなるべく避けたいことである。そこで少しでも学習者のモチベーションを保つためにタスクを取り入れ、またアウトプットを繰り返すことで学んだことの定着を図ることは大変重要である。学習者にとって単語を覚えることは大変な作業である。だからこそタスクを取り入れた活動などを繰り返しながら英語を学修し、結果としてグローバル社会で英

語力を発揮できる生徒が増えて来ることが望ましい。また、タスク活動は単語学習だけでなく文法その他の学習についても定着を図る望ましい手法であり、今後様々な授業での効果的な活用が期待される。

### 参考文献

- 江利川春雄, 亘理陽一(2011), 「大学英語授業での協同学習」, 『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』, pp 146-147
- 川 貞夫, (2013), 「語彙指導の諸問題と語彙学習方略の学習をめざした指導」, 『英語能力向上を目指す教育実践』, Vol. 25, pp. 186-204. [https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/pdf/bulletin/vol\\_25/vol\\_25\\_p\\_186-p\\_204.pdf](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol_25/vol_25_p_186-p_204.pdf), 2015年11月20日閲覧
- 川本祥也, 佐藤臨太郎(2011), 「PPP 授業と TBL 授業の文法学習における効果の比較」, [http://www.naraedu.ac.jp/CERT/bulletin\\_2011/CERD\\_2011-R\\_19.pdf](http://www.naraedu.ac.jp/CERT/bulletin_2011/CERD_2011-R_19.pdf) 2015年11月20日閲覧
- 坂田 浩, 福田ステーブ(2014), 「大学英語教育における Task-Based Instruction (TBI) の可能性と限界 一学習方略形成と自己調整学習を目指した授業に関する一考察一」, [www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/file/.../LID\\_10302003.pdf](http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/repository/file/.../LID_10302003.pdf) 2015年11月20日閲覧
- 高木孝子, Frank Bailey (2015), *From Japanese English to Natural English* 3ステップ式日常英語ライティング・リスニング, pp 5-8
- 玉木佳代子(2011), 「外国語学習におけるプロジェクト授業—その理論と実践—」, [http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf\\_21-2/RitsIILCS\\_21.2\\_pp\\_231-246\\_TAMAKI.pdf](http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-2/RitsIILCS_21.2_pp_231-246_TAMAKI.pdf) 2015年11月20日閲覧
- 日本政府観光局(2015), 「2015年 訪日外客数(総数)」, [http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism\\_data/pdf/2013\\_15\\_tourists.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/2013_15_tourists.pdf), 2015年12月16日閲覧
- 日本貿易振興機構(2015), 「2014年度日本企業

- の海外事業展開に関するアンケート調査」,  
[https://www.jetro.go.jp/ext\\_images//news/releases/20150311949-news/gaiyou\\_1.pdf](https://www.jetro.go.jp/ext_images//news/releases/20150311949-news/gaiyou_1.pdf), 2015年11月20日閲覧
- 藤井浩美, (2005)「日本の英語授業におけるタスク活動の特徴と課題：小学校・中学校のタスク活動の分析を通して」, 鳴門教育大学研究紀要 Vol. 20, pp. 163-170. KJ 00004193359. pdf, 2015年11月1日閲覧
- (株)ベネッセ教育総合研究所 (2009)「調査データクリップ!子どもと教育」, [http://berd.benesse.jp/berd/data/dataclip/clip\\_0014/index\\_4.html](http://berd.benesse.jp/berd/data/dataclip/clip_0014/index_4.html) 2015年11月20日閲覧
- (株)ベネッセ教育総合研究所 (2014)「中高生の英語学習に関する実態調査2014」, [http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_ALL.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf) 2015年11月20日閲覧
- 松家鮎美, 山中マーガレット (2015), Utilizing Tablet Devices in Tourism English Classes ~ Recommending a Popular Destination to Visitors from Overseas~, 文化創造研究センター(ページなど)
- 三浦 孝 (2013)「指導困難校での英語教育：英語を得意にし・英語を好きに指せる指導とは」, 教科教育学篇『静岡大学教育学部研究報告』 Vol. 44, p. 55-84, <http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/7349/1/44-0055.pdf> 2015年11月2日閲覧
- Ameri, Alireza, (2010) "Prabhu's Procedural Syllabus" ELT-zone, <http://faculty-pavilion.eltzone.org/wp-content/uploads/2010/10/article.pdf>, 2015年11月1日閲覧
- Cheng, Hsing-Fu and Zoltan Dörnyei, (2007) "The Use of Motivational Strategies in Language Instruction: The Case of EFL Teaching in Taiwan", *Innovation in Language and Teaching*, Vol. 1, No. 1, pp. 153-174. <http://resourcesforteflteachers.pbworks.com/f/Dornyei+and+Cheng+on+EFL+in+Taiwan.pdf> 2015年9月6日閲覧
- JACET教材開発研究会, *ENGLISH LOCOMOTION*, pp 17-18
- Krashen, Stephen D., (1988) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*, Prentice Hall.
- Schmitt (2002) Schmitt, N. (2002). Schmitt, N. Current Perspective on Vocabulary Teaching and Learning : 827-841, Schmitt, N. (Ed). *An introduction to applied linguistics*. London: Arnold. [https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/pdf/bulletin/vol\\_25/vol\\_25\\_p\\_186-p\\_204.pdf](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol_25/vol_25_p_186-p_204.pdf) 2015年11月17日閲覧
- Swain, Merrill, (1995) "Three Functions of Output in Second Language Learning," G. Cook, G. and B. Seidlhofer, eds, *Principle and Practice in Applied Linguistics*. Oxford University Press. <http://ja.scribd.com/doc/105840639/Swain-1995-Three-functions-of-output-in-second-language-learning#scribd> 2015年11月17日閲覧
- Weskamp, Ralf : (2004) „Aufgaben im fremdsprachlichen Unterricht," *Praxis Fremdsprachenunterricht 1, Nr. 3*, 162-170. [http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf\\_21-2/RitsIILCS\\_21.2pp231-246TAMAKI.pdf](http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-2/RitsIILCS_21.2pp231-246TAMAKI.pdf) 2015年11月17日閲覧

資料1

資料2

学習者に与えた 語彙リスト

次週に行ったテスト

単語グループ A

1. zip up
2. one-size-fits-all
3. panty hose
4. pants
5. dress
6. tights
7. sleeveless
8. jacket
9. sewing machine
10. remake

単語グループ B

1. cellphone
2. on campus
3. on weekends
4. option
5. rarely
6. text
7. usually
8. vast
9. stay at home
10. go out

単語テスト

1. zip up
2. tights
3. remake
4. sleeveless
5. sewing machine
6. vast
7. rarely
8. text
9. cellphone
10. on campus

(問題用紙に英語の書いてあるものには日本語訳を, 日本語の書いてあるものには英単語を書くという指示において, 上記10個を出題した。)

